

二〇一八年三月
「倫理学紀要」第二十五輯 抜刷

アリストテレス倫理学の方法論

——「エンドクサの手法」と「弁証的問答法」——

加藤喜市

アリストテレス倫理学の方法論 ——「エンドクサの手法」と「弁証的問答法」——

加藤 喜市

アリストテレスの倫理学を、「真なる第一の前提」に基づく「論証 *apodexis*」ではなく、人々の「エンドクサ（通念・定評ある見解）*endoxa*」¹に基づく「弁証的問答法 *dialektike*」²の議論と解する流れは、バーネットに始まるという。⁵「現われ *phainomena*」を措定して「難問 *aporia*」を検討することで「エンドクサ」における真理を証明する——オーウェンがその卓抜した論文で取り上げたことにより一躍有名となった『ニコマコス倫理学』（*EN*）第七卷のテクスト箇所（1145b.7）は、やがて、アリストテレスにおける「弁証的問答法」の典型例と見なされることになり、⁶アリストテレス倫理学の方法論についても、この箇所を典拠にしてさまざまに論じられてきた。だが、近年、「弁証的問答法」の書としての倫理学という従来の読みに対して、多くの論者（とりわけ「オルガノン」の研究者たち）から疑義が呈されている。⁸この傾向は、すでにバーンズにも認められるが、ひとつの極は、フレデーによる「エンドクサの手法 *the endoxic method*」の「脱神秘化 *demystify*」である。⁹彼女は、

当該箇所では示されているこの手法が、アリストテレス倫理学はもとより、アリストテレスの哲学全体における「規則 rule」ではなく例外「exception」だと断じる。

【一】従来、アリストテレス倫理学の方法とされてきた「エンドクサの手法」とはいかなるものであり、【二】その手法と『トピカ（トポス論）』で語られる「弁証問答法」の関係をどのように捉えるべきか。これらについての見通しを立てることが本稿のひとまずの課題となる。論文全体の構成として、まず、*EN* 第七卷第一章の問題のテキスト箇所を確認してから、基本的用語の語釈、ならびに無抑制論の議論展開を見ることで「エンドクサの手法」の内実をあきらかにする（第一節）。そのうえで、この手法に関するバーンズとフレデーの論文を検討する（第二節）。『トピカ』第一卷第二章の解釈を通して「エンドクサの手法」と「弁証問答法」の間に見られる或る種の対応関係を指摘してから（第三節）、さらに「弁証問答法」の倫理学への適用可能性へと論じ進む（第四節）。最終節において『エウデモス倫理学』（*EE*）第一卷の方法論的記述にも目を転じて、アリストテレス倫理学における方法論について幾ばくかの展望を拓くことを目指す（第五節）。

1 *EN*における「エンドクサの手法」

考察の出発点とすべきは、*EN* 第七卷第一章における件の箇所（1145a27）である。このテキストは、*EN* という著作全体の方法論として語られるものではなく、第二巻（第六卷で展開された徳論）に続く、「無抑制論（*akrasia*）」論の序に置かれている。

また、他の場合と同様に、現われを措定して、まず、難問を突き詰めることで、そのようにしてこうした

諸情態〔無抑制等〕について、できればすべてのエンドクサを、そうできなければ、大多数のもつとも主要な〔エンドクサを〕証明する必要がある。というのも、困難が解決されてエンドクサが残されるならば、十分に証明されたことになるだろうから。(1145b2-7)

引用では、三段階の手順が語られている。(1) まず、諸々の「現われを措定して」、(2) 次に、それらが孕む「難問を突き詰めること」——「難問」を導出して吟味すること——、(3) そのうえで、「困難」の「解決」を通じて論題に関する「すべての」もしくは「大多数のもつとも主要なエンドクサ」を証明する必要が説かれている。¹⁰以下では、これらの手順に対応するかたちで、まず、(A)「現われの措定」について、「現われ」・「エンドクサ」という語の基本的意味に関する解釈を取り上げる。つぎに、(B)「難問の導出・吟味」・(C)「エンドクサの証明」という手順に関して、無抑制論で実際に展開されている議論を追う。これらを通して、問題のテキストで語られている「エンドクサの手法」の実体をあきらかにしていく。

(A) 「現われの措定」

(A)「現われの措定」については、アリストテレスにおける方法論研究の起爆剤となったオーウエンの論文『*Tithenai ta phainomena* (現われを措定すること)』が参照されるべきである。¹¹この論文の全体は、探求方法に関する『分析論前書・後書』と『自然学』の不一致を解消するための試みとして捉えられる。オーウエンは論文の前半で、「現われ」という語に関して、『動物部分論』・『天体論』などで用いられる (i)「観察される事実 observed facts」という意味と、*EN* などに見られる (ii) 人々に「思いなされている見解 opinion」という意味とを区別する。¹³そのうえで、『自然学』における「現われ」に (ii) の意味を帰して、『自然学』を一種の「弁

証的問答法 *dialectical method*」の書として読みつつ、(i) の知覚に基づく事実も誤りうるものであり、また (ii) の人々による見解も精査を経て確固としたデータになりうるとして、二つの意味の共通性を指摘する。最終的には二つの『分析論』の「現われ」を二義を包括する広い意味で捉えて二書間の齟齬を解消するというのが、オーウエンの戦略である。

オーウエンの試みについてはすでにさまざまな観点から批判がなされているが、ここで着目したいのは「現われ」・「エンドクサ」の意味に関する論点である。上記の「現われ」の二義のうち (ii) の典型例として、オーウエンは問題の引用箇所を引いている。この箇所の「現われ」に (i) 「観察事実」が含まれる可能性は、必ずしも排除されないだろう。だが、オーウエンが正しく指摘するように、ここでの「現われ」については、(ii) 「思いなされている見解」の意味で解すべきである。というのも、EN 第七卷第一章の後続する箇所 (II 45b8-20) でアリストテレスの措定する「現われ」はどれも「人々の考え」・「言説」であるから。「無抑制」に関する合計六つの見解が列挙されているが、各々に対して「〜と思われる *dokei*」(8) ・「或る／他の人々は〜と主張する *phúsin*」(b17, 18) ・「〜と言われている *legontai*」(b19) などの表現が用いられたうえで、第一章全体は次の文言で結ばれる。「以上が〔無抑制について〕語られていること *ta legomena* である」(b20)。

オーウエンは「現われ *phainomena*」と「語られていること *legomena*」だけでなく、引用後半の「エンドクサ *endoxa*」についても、この文脈では同じものを指すと解している。¹⁶ 敢えて訳語を与えずにギリシア語を音写した「エンドクサ」は、『トピカ』を参照するならば、以下のように規定されている。

エンドクサは、すべての人、あるいは多くの人々、あるいは知者たちに、また、そのような人々〔知者たち〕のうちのすべての人に、あるいは多くの人々に、あるいははとりわけ有名で定評ある人々に思いなされている

るものである。(Top. 100b21-3)

引用を字義通りに読めば、万人・大衆・知者による見解が「エンドクサ」だということになるはずだが、諸家の解釈は割れている。まず、(1A) エンドクサが「通念」や「常識」といった人々の「一般の見解」を意味するという従来の解釈に対して、(1B) かねてからバーンズが、エンドクサというギリシア語について、日常用法としての形容詞「エンドクソス(評判のよい)」とのつながりを指摘している¹⁷。エンドクサには、一般の人々の見解だけでなく、評判のよい人、つまり専門家の学説も含まれるのである。

以上のように、それが誰の意見であるかという論者の点からエンドクサを規定する解釈に対して、(2) スミスは『トピカ』のこの箇所を、エンドクサの定義ではなく、「エンドクサの種類を明確化」しているものと解する¹⁸。彼によると「エンドクサ」は『弁論術』における「説得的な *pathanon*」と同じように、「相対的な語」であって²⁰、たんに「誰かにとつて受け入れられるもの」を意味するに過ぎない²¹。「弁証問答家」は、議論で用いるための「弁証問答法の前提」(104a3)として、さまざまな種類の「エンドクサ」を「収集」するが、そのなかに万人・大衆・知者たちの考えなどが含まれるのである²²。

スミスの解釈は『トピカ』のテクスト理解としてはたしかに整合的だが、問題は「エンドクサ」がただの「ドクサ」²³と殆ど同じ意味になってしまふことである。バーンズの指摘する「評判の良い」という語の原義からしても両者の差異化は必要であると考えられる。それゆえ、「エンドクサ」と「現われ」との関係について、本稿ではリーヴの言うように、「*endoxa*とは、なんらかの認識的重要性を付加された *phenomena* である」と解しておく。すなわち、人々の見解という広い意味での「現われ」のうち、とくに「定評ある見解 *reputable opinion*」をエンドクサとして理解する。

以上のように、二つの概念が重なりつつも異なるということ認めたとえであれば、無抑制論、という文脈における、「現われ」と「エンドクサ」は、オーウェンやバーンスの指摘するように、²⁵ 実質的には、同じものを指していると解して良いだろう。²⁶ 換言すると、アリストテレスは無抑制論において「現われ」を、取り上げるに値する「エンドクサ」として措定しているのである。

(B) 「難問の導出・吟味」と(C) 「エンドクサの証明」

さて、問題となっている引用箇所冒頭には、「他の場合と同様に」という文言が見られた。先のオーウェンの論文に起因する理解の線に即すと、²⁷ この引用は、倫理学や自然学などの様々な学に適用される「弁証的問答法の議論 dialectical argument」の手法を示すものである。これに対してクーパーは、この箇所に見出される方法が「弁証的問答の方法 dialectical method」であるか否かについての検討に立ち入る必要はないとして、²⁸ ここでの手法が「難問解決の方法 a method of puzzle resolution」であることを強調する。²⁸ またクーパーはこの手法の適用範囲についても、*EN* 第七巻の無抑制論・快樂論のみに限定する。²⁹

ここでは(B)「難問の導出・吟味」と(C)「エンドクサの証明」について、テクストに後続する無抑制論で実際に展開されている議論を見ておこう。³⁰ 無抑制をめぐる難問は、*EN* 第七巻第二章において、第一章で列挙された諸々の「現われ」から矛盾・対立する見解を導出することで得られている。ここでは、無抑制論においても有名かつ重要な「難問」を取り上げる。すなわち、「無抑制な人は、「悪いと」知りながら情念のゆえに、低劣なことを行なう」(1145b12-3)という「現われ」は、以下の引用に見られるソクラテスの主知主義的な言説に反することになる。

或る人々は、「悪いと」知りながら「無抑制」であることはありえないと主張する。というのも、ソクラテスが考えていたように、知識が内在していながら、なにか別のものがそれを支配して、奴隷のように引きずりまわすとしたら、驚くべきであるから。事実、ソクラテスは無抑制など存在しないと考えて、この議論と全面的に戦っていた。というのも、誰も理解していながら最善のことに反して行為するのではなく、「そうした行為が生じるとしたら」無知のゆえなのであるから。(1145b25-29)

ソクラテスによると(1)何か別のものが「知識を引きずりまわすことなどありえず、(2)悪しき行為は「無知」によるものであるから、知りつつ悪を為すという「無抑制など存在しない」。だが、「この言説は「無抑制を認める」現われと *lois phanomenois* あきらかに矛盾する」(1145b28)。第二章の末尾でこうした難問を「解決」するための手続きが、以下のように語られる。

さて、何らかこうした難問が生じているが、これらの「見解の」うちで或るものを斥けて、また或るものを残さなければならない。というのも、難問の解決は「真理の」発見だから。(1146b-8)

ここで示されているのは、真偽未定な諸々の「現われ」から導出された「難問」について、諸説のうちどれが真であるか(あるいは、どれが偽であるか)を判定するという手続きである。この手順は、考察を通じて残された「エンドクサ」の真なることを「証明」するためのものとも言える。ただし、この作業は、実際には真説の選定に終始するものでなく、むしろ、矛盾・対立する双方の見解の、アリス、トテレスによる調停としての側面が強い。事実、EN 第七卷第三章の末尾で、上述の無抑制に関するソクラテスの立場は、無抑制の存在を認める「現

われ」とも両立するかたちで認められることになる。³¹

2 「エンドクサの手法」の「脱神秘化」

以上で見てきたように、無抑制論で措定される「現われ」は「エンドクサ」とも重なるものであり、続く無抑制論の議論では、これらの「現われ」・「エンドクサ」から導出された「難問」の解決を通して、残された「エンドクサ」の正しさを「証明」という手続きが採られていた。

早くからバーンズは、*EN*第七巻で説明されているこの方法を、「仰々しくgrandiosely」と断りながらも、「弁証問答法」ではなく「エンドクサの手法 the endoxic method」と称していた。³² アリストテレス研究者たちの間に「エンドクサの手法」が「氾濫 inflation」するうえで影響力を及ぼしたのは、方法論研究に先鞭をつけたオーウェンの論文というよりも、むしろそれを承けたバーンズの研究であるとフレデーは見ている。³³ バーンズの狙いの一つは、すでに見たように、エンドクサを人々の「通念・「常識」の意味で解する従来の立場に反旗を翻すことであった。バーンズは「エンドクサ」と「エンドクソス（評判の良い）」のつながりを指摘して、アリストテレスを「常識哲学 Common Sense Philosophy」の陣営から解放しようと試みたのである。³⁴

「エンドクサ」のうちには通念・常識だけでなく、知者・専門家の見解も含まれるという点に関しては、先に見た『トピカ』の記述からしても動かし難い。けれども、この論文で最終的に導かれているバーンズの結論はあまりに奇を衒っており、直ちには認められない。彼によると、「エンドクサの手法」はアリストテレスを「常識哲学」の側には組み入れただけでなく、或る種の見解を考察から排除するという「限定的 restrictive」な側面をもつ。³⁵ この制限に関する「正当化」は成立せず、手法それ自体はむしろ「悪しきもの vicious」である。とはいえ、バー

ンズによると、「アリストテレスの実際の哲学が、その手法によって深刻に損なわれている *ruined* わけではない」。なぜなら、(1) 「エンドクサの手法」によって課される制限は最小限のものであって、この手法は形式的には空虚ではないけれども、「殆ど無内容」である。また、(2) こうした方法論上の考えは、アリストテレスが哲学を実践する際にそれほど妨げとならなかった(彼は、無抑制に関するソクラテスの「奇妙な見解」や、ゼノン・パルメニデスの「風変わりな理論」を取り上げている)。要するに、バーンズに言わせると、「エンドクサの手法」は名ばかりのものとして殆ど機能していないことになる。³⁶

近年、「エンドクサ的な(定評ある)神秘 *the endoxon mystique*」という刺激的な論文を著して、エンドクサの「脱神秘化 *demythification*」を企てたフリーデの立場も、「エンドクサの手法」の限界を示すというまさにこの一点で、バーンズの方向に連なるものと言える。アリストテレス研究における「エンドクサの手法」の跋扈を糾弾するフリーデは、クラウトを筆頭とした「エンドクサの友」を厳しく批判する。論文後半の「エンドクサの手法の精選学 *説誌 a short eclectic doxography of the endoxic method*」において、彼女はオーウェン以降の解釈史として、バーンズ・アーウィン・ヌスバウム・クーパーの諸説を瞥見し、アリストテレス倫理学研究において「エンドクサの手法」が蔓延るさまを描き出す(フリーデのこの議論それ自体が「エンドクサの手法」に即して展開されている)。

エンドクサが「真実らしい(だが、必ずしも真ならず) *plausible* (but not necessarily true)」という意味をもっており、アリストテレスにとっては「名誉ある称号でなかった」との指摘や、倫理学における「原理・出発点」とエンドクサを安易に結びつけるべきでないという主張など、⁴⁰ 彼女の取り上げる論点は多岐に亘る。こうした彼女の読みに一貫しているのは、「エンドクサの手法」の適用例をきわめて狭く無抑制論のみに限定することであり、この手法がアリストテレスの方法論における「規則ではなく例外」であって「唯一 *unique*」であること⁴¹を示そうとする態度である。

さらにフレーデは、「エンドクサの手法」だけでなく、「弁証的問答法」を徒に振りかざすことに関しても否定的である。何かを主張する時に「ありうる反論」を考慮するということは、哲学という営みに携わる以上、私たちの誰しもが行なっていることなのであって、もし「弁証的問答法」がこれを意味するのであれば、「空虚な通り名」となってしまう。⁴² アリストテレスが「エンドクサの手法」を用いたということとそれ自体も、一つの「エンドクサ」に過ぎないのであって、それは「必ずしも真ならず」と彼女は論を結ぶ。⁴³

たしかに、フレーデの指摘を一部受け入れて、「エンドクサの手法」が *EN* において嚴格に守られているのは、*EN* 第七巻前半の無抑制論のみであると言わなければならない。というのも、*EN* の随所においてこの手法が部分的・変則的なたちで用いられていると指摘はできる。だが、そうした箇所では、先に見た (A) 現われの措定↓(B) 難問の導出・吟味↓(C) エンドクサの証明という三つの手順が、無抑制論とまったく同じ仕方では、なされていないのである。友愛論や快樂論をはじめとして、*EN* の諸箇所の問題となっているのは紛れもなく「矛盾・対立する見解」であり、アリストテレスはそれらを調停して「解決」するという方針を採っている。けれども、その際の「現われ」・「難問」の提示の仕方は恣意的であり、第八巻の友愛論のように、はじめから「難問」を取り上げてすぐさま反駁に移ることもあれば、第七巻の快樂論のように、諸説の列举のみに留まり、それらが「難問」を孕んでいることを殊更に明示しないことも多い。

フレーデ曰く、アリストテレスが「〜と見える *phantai*」「〜と思われる *dokoi*」「おそらく *isai*」といった婉曲表現を度々用いているのを見習って、「現代の私たち（アリストテレス研究者）は、解釈において自制すべきであり、アリストテレスのテキストがそのような特徴を正当化するところのみ「エンドクサの手法」と「弁証的問答法」についても語るべきである」⁴⁴。おそらく、こうしたフレーデの解釈の背景にあるのは、アリストテレスの本文において「エンドクサ」や「弁証的問答法」という語が用いられているところにかぎって典拠とすべき

だという方針である。ENにおいて「エンドクサ」という語は、問題の無抑制論の箇所以外では四度しか用いられておらず(1098b28, 1122b32, 1127a21, b25)（これらはいずれも「通念・定評ある見解」の意味では解せない。「弁証問答法」という語に至っては出現さえしていない。けれども、たとえ、テキストに明示的なたちで語られていなくとも、議論において或る手法が用いられているということは考えられるのであって、「エンドクサの手法」や「弁証問答法」の理解そのものについて、なお再考の余地がある。

3 『トピカ』における「弁証問答法」

以上の検討を経て見えてきたのは、問題のテキストで語られている手法が、各研究者によって多様に解釈されており、決して一つの像を結んではないということである。オーウェンは(A)「現われの措定」、すなわち人々の意見の列挙という点に焦点を当てて論じ、この手法を『トピカ』における「弁証問答法」との関連で捉えていた。後者の点を否定したクーパーは(B)「難問の導出・吟味」という契機を重視して、この手法を「難問解決の方法」として理解している。さらに、バーンズは(C)「エンドクサの証明」における「エンドクサ」という概念に着目して、引用で語られている手順の全体を指すものとして「エンドクサの手法」という呼称を創出するに至った。

前節で取り上げたフレーデの論文が示しているのは、これら三つの契機が組み合わさって、この順番通りに用いられているケースが、無抑制論にしかないということである。フレーデの指摘は、ENの無抑制論で示されている手法がそのままの仕方では他箇所に見られないというものであった。だが、アリストテレスは、倫理学の考察のそれぞれの場面において、それぞれの手順を組み合わせたか、あるいは個別に用いたりしているのであって、この三つの手順の厳格な適用に固執する必要はないように思われる。

それでは、この手法と「弁証的問答法」の関係についてはどうか。『トピカ』第一巻第二章では、「弁証的問答法」を主題とするこの著作の「探求」の有用性が、四点（三点＋ a ）から説明されている。⁴⁵このうち第一の論点については後ほどあらためて見ることにして、ここでは第二から第四の論点のテキストを検討する。まず第二の論点として、「弁証的問答法」を扱う『トピカ』の論考は「討論のために」役立つとされている。⁴⁶

また、「トピカ」の探求は「討論のために（役立つ）」。その理由は、多くの人の見解を枚挙したうえでなら、彼らがあまく論じていないと私たちに思われる点について歩み（考え）を変えさせながら、他の人ではなく、彼ら自身の考えを基にして、彼らと論じ合うことができるからである。（*Top. 101a30-34*）

引用で語られているのは、（1）「多くの人々の見解を枚挙したうえで」（2）「歩み（考え）を変えさせながら」（3）「彼ら自身の考えを基にして」論じ合うということである。これらの内容は、「エンドクサの手法」における三つの手順と緩やかに重なるが、ここではとくに（1）見解の列挙という手順が、（A）「現われの措置」にまさしく対応することを指摘したい。

つぎに、『トピカ』の探求の有用性に関する第三の論点について、先に見たクーパーの解釈では、「難問解決の方法」という概念を導入することで「弁証的問答法」との関係は濁していた。だが、以下の記述はあきらかに、*EN*の「エンドクサの手法」と『トピカ』における「弁証的問答法」のつながりを強く示唆するものである。⁴⁸

また、『トピカ』の探求は「哲学的学問のために（役立つが）、それは、「肯定・否定」双方の（立場）に関して難問を突き詰めれば、私たちは、それぞれにおける真偽を容易に見極められるからである。

こ)では哲学的学問にとって『トピカ』の考察のもつ有用性が、「難問の突き詰め」による「真偽」の「見極め」という点から説明されている。注目すべきはENと『トピカ』の両方で「難問を突き詰める」というまったく同じ単語が使われていることである。ただし、先に見た無抑制論における難問の「解決」は、真説・偽説の「見極め」に終止するものでなく、ソクラテスの立場とそれに反する「現われ」という二つの立場を、アリストテレスがみずからの枠組みから再解釈するものであった。

最後に、『トピカ』の有用性に関する第四の論点であるが、これは、オーウエンが論文「現われの措置」で言及している箇所である。⁴⁹

さらに、「『トピカ』の探求は」各々の学にとっての第一のもののために「役立つ」。というのも、当の学に固有の原理から、その原理について何かを言うことは不可能であり、原理があらゆるものの第一のものである以上、各々についてのエンドクサに基づいて、それらについて論じる必要があるからである。然るに、このことは弁証問答法に固有であるか、とりわけ相応しい。というのも、「弁証問答法」吟味に向いており、あらゆる探求の原理のための道を有しているのだから。(101a34-b4)

引用では、「エンドクサに基づいて」「原理」について論じることが「弁証問答法」に「固有であるか、とりわけ相応しい」とされている。こうした「原理」発見のための方法として「弁証問答法」の力を最大限に見積もるのは、アーウィンである。⁵⁰彼の解釈においては、「エンドクサ」に基づく「弁証問答法」は、『分析論後

書』の末尾(第二卷第十九章)において語られている「知性(知的直観) *nous*」に代わるものとして、「第一哲学」をはじめとした哲学的学問の「第一原理 *the first principles*」を確立するための手法と見なされる。

だが、このようなアーウインの見立てに対しては批判も多く、とりわけスミスによって、『トピカ』に内在的に斥けられている。彼によると「弁証問答法」の特徴としては、アーウインの言う「エンドクサに基づく」ということだけでなく、(1)「問いと答えによって進行する *proceed by question and answer*」⁵¹ (2)「類に限定されない一般性 *unrestricted generality*」の二点を挙げねばならない。⁵² さらに、「弁証問答法」が関わるのは、個々の学の「第一原理」ではなく、矛盾律・排中律といった各学問を越えて適用される「共通の原理」なのである。⁵³

さて、以上で『トピカ』の有用性に関する三つの論点を確認したが、第二の論点における「見解の枚挙」、第三の論点における「難問を突き詰めること」、そして第四の論点における「エンドクサに基づいて」という表現——これらと(A)「現われの措置」(B)「難問の導出・吟味」(C)「エンドクサの証明」の対応関係を見るとき、*EN*の無抑制論の方法論的記述が、『トピカ』において語られている「弁証問答法」の議論を踏まえ、たものであるということに、もはや疑いを挟む余地はないだろう。とはいえ、私たちが言えるのは、あくまで「エンドクサの手法」における手順のそれぞれが「弁証問答法」と関わるということまでであって、これらがそのまま「弁証問答法」であるということではない。むしろ、「弁証問答法」は、「エンドクサの手法」を包含するような、より広い概念であるように思われる。こうした視座のもと、以下では、「弁証問答法」の倫理学への適用可能性について考察したい。

4 「弁証的問答法」と倫理学

スミスは「弁証的問答法」の特徴として「エンドクサに基づく」ということよりも、(1) 問いと答えによって進行すること、(2) 類に限定されない一般性という二つを挙げていた。

前者に関連して、前節で論じ残した『トピカ』の有益性に関する第一の論点として、この著作の探求は、「訓練のために *pros gymnasium*」(101a28) 役立つとされる。これに関してはスミスが指摘しているように、『トピカ』第八巻で示されているような、問い手と答え手によるやり取りを思い浮かべれば良い。すなわち、問い手(攻撃側)に対して答え手(守備側)が肯定・否定のどちらかを立論すると(eg 「不正をなすことは不正を受けることより悪いか否か」という問題に対して「然り」と答える)⁵⁵、それに対して「然り」「否」で答えられるような質問(eg 「不正をなすことは不正を受けることより醜いか否か」)を問い手が加えていき、最終的に答え手を矛盾に追い込むという一種の「知的遊戯」である。「ディアレクティケー」というギリシア語は、もともと対話による問答の技術を意味する語であり、プラトンの「哲学的対話問答法」、さらにはソクラテスの「対話 *dialogos*」にまで遡る。一般にソクラテスの「論駁法 *elenchos*」として知られる問答法は、対話相手を矛盾へと導き、「不知」を自覚させるものであった。たとえば、初期対話篇『ラケス』において、將軍ラケスとニキアスは、ソクラテスとの対話によって自家撞着に追い込まれてしまい、結局「勇氣とは何か」という答えの出ないまま、「難問 *aporia*」を残して対話篇は幕を閉じる。このような〈対話の技術〉という広い意味において、倫理学をはじめとしてアリストテレス哲学の随所に認められる〈先行学説の検討〉は、「学説そのものを対話相手として」⁵⁶なされる一種の「弁証的問答法」の営みだと言える。

さらに、後者に関連して、アリストテレスは『トピカ』冒頭において、この著作の目的を次のように述べている。

この論考の目的は、それによって私たちが、定立されたあらゆる問題について、エンドクサから推論することができるような、また私たち自身が議論を引き受けるときに何ら矛盾したことを言わないような方法を発見することである。(Top. 100a18-21; cf. *Rhet.* 1354a1-3)

「弁証的問答法」を主題とする『トピカ』は、「あらゆる問題について」「エンドクサに基づいて推論することができる」「方法」の発見を目指す。この対象の無制約性という点において「弁証的問答法」は謂わば「哲学と重なる営み」⁵⁷であって、倫理学の場合に限ってのみ適用不可能などということはありません。たしかに、「必ずしもすべての前提やすべての問題が弁証的問答法に関わる」(104a5)わけではないが、アリストテレスの挙げる「前提・問題」には、「倫理的なもの」・「自然的なもの」・「論理的なもの」(105b20-21)が含まれるのである。実際、『トピカ』において、「定義・固有性・類・付帯性」という四つの「述語様式 *praedicabilia*」に即して論じられるさまざまな「トポス」(論点・論拠・論法 *etc.*) の用例には、「倫理的なもの」も多く挙げられている。そうであるならば、倫理学において「弁証的問答法」が適用されることを妨げるものは、なにもないのである。

5 アリストテレス倫理学の方法論

アリストテレスが、以上で見たような「弁証的問答法」を、倫理学における真理集積のための重要な装置と見なしていたことは、この手法に特徴的な「歩み(考え)」を「変える」という契機について語る、*EE* 第一巻第六章の記述からも窺われる。⁵⁸

これらすべてについて、現われを証拠・範例として用いながら、議論を通じて確信を求めるように努めなければならぬ。というのも、もつとも強力なのは、すべての人が述べられることに対して、明確に同意することであるが、それが不可能ならば、少なくとも何らかの仕方ですべての人が歩み「考え」を変えたいうえで、それをなす（＝同意する）だろうことである。というのも、各々は、真理に対してなんらかの持ち分を有しているものであり、そこからこれらの問題について証明する必要があるからである。（EE1216b26-35）

幸福を論じるためには、(1)「現われ」を用いながら確信を求める必要があるが、最初から「すべての人が同意する」という全会一致が難しい以上、人々はなんらかの仕方(2)「歩み「考え」を変えたいうえで」合意に至らなければならぬ。これが可能となるのは、(3)人々に真理の「持ち分」が内在しているからであり、各人のもつ〈真理の欠片〉に基づいて「証明」することを、アリストテレスは自らの方法として自覚的に用いていた。ENの無抑制論の場合とは違ってテキストに「エンドクサ」という語が登場しない以上、ここでの方法を「エンドクサの手法」と呼ぶことはできない。あくまで一種の「弁証的問答法」と呼ぶほかない。「真ではあるが明瞭には語られていない事柄から〔出発して〕、混然と語られているのが常であった事柄を、絶えずより識られているものに変えながら進む者にとって、明瞭なものが生じるだろう」(b26,35)。

本稿の冒頭で見たように、アリストテレス倫理学の全体を一貫して、「弁証的問答法」の実践として捉えるという「エンドクサ」は、徐々にその牙城を崩しつつある。アリストテレスは、倫理学において決してひとつの方法

のみを用いているのではなく、場面によっては、たとえば *EN* 第一卷第七章の「機能の論証 *ergon*-argument」など、「論証」を用いることさえもある。「エンドクサの手法」という数多ある手法のうちのひとつの型を取り上げて、倫理学の全域に適用するという幻想は、「脱神秘化」されて然るべきである。

だが、今や主流となりつつあるこうした解釈の方向を受け止めつつも、本稿では、アリストテレス倫理学が、或る種の「弁証的問答法」の性格を有する可能性が論じられた。それは *EN* 第七卷で語られる三つの手順と『トピカ』で語られる論点の対応を介してというだけでなく、問い手と答え手による〈対話の技術〉というもつとも広い意味においてであり、また「弁証的問答法」そのものが持つ適用範囲の普遍性によるものである。

【参考文献一覧】

ギリシア語テキスト

- Bywater, I. (1894) (ed.) *Aristotelis Ethica Nicomachea*, Oxford Classical Text (Clarendon Press) .
- Ross, W. D. (1958) (ed.) *Aristotelis Topica et Sophistici Elenchi*, Oxford Classical Text (Clarendon Press) .
- Walzer, R.R. and Mingay, J.M. (1991) (eds.) *Aristotelis Ethica Eudemia*, Oxford Classical Text (Clarendon Press) .

二次文献

- Barnes, J. (1980) 'Aristotle and method of ethics', *Revue internationale de philosophie*, 133/134: 490-510.
- Burnet, J. (1900) *The Ethics of Aristotle*, rep. (1973) Arno Press.
- Charles, D. (2009) 'Nicomachean Ethics VII. 3: Varieties of akrasia', in Natali (2009) .
- Cooper, J. M. (1999) *Reason and Emotion* (Princeton University Press) .
- ————— (2009) 'Nicomachean Ethics VII. 1-2: Introduction, Method, Puzzles', in Natali (2009) .
- Devereux, D. (2015) 'Scientific and ethical method in Aristotle's *Eudemian and Nicomachean Ethics*', in Henry and Nielsen (2015) .
- Frede, D. (2012) 'The *Endoxon* Mystique: What *endoxa* are and what they are not', *Oxford Studies in Ancient Philosophy*, 43.
- Henry, D. and Nielsen, K. (2015) (eds.) *Bridging the Gap between Aristotle's Science and Ethics* (Cambridge) .
- Irwin, T.H. (1988) *Aristotle's First Principles* (Clarendon Press) .
- Karbowsk, J. (2015) '*Endoxa*, facts, and the starting points of the *Nicomachean Ethics*', in Henry and Nielsen (2015) .
- Kraut, R. (2006) 'How to Justify Ethical Propositions: Aristotle's Method', in his (2006) (ed.) *The Blackwell Guide to Aristotle's Nicomachean Ethics* (Blackwell) .
- Natali, C. (2007) 'Rhetorical and Scientific Aspect of *Nicomachean Ethics*', *Phronesis*, 52-4.
- ————— (2009) (ed.) *Aristotle: Nicomachean Ethics, Book VII Symposium Aristotelicum* (Oxford University Press) .
- ————— (2010) '*Posterior Analytics* and the Definition of Happiness in EN I', *Phronesis*, 55-4.

- ・ Nussbaum, M. C. (1986) *The Fragility of Goodness: Luck and Ethics in Greek Tragedy and Philosophy* (Cambridge University Press) .
- ・ ————— (1986) (ed.) *Logic, Science and Dialectic: Collected Papers in Greek Philosophy* (Cornell University Press) .
- ・ Owen, G.E.L. (1961) *Tihenai ta phainomena*, in Mansion, S. (ed.) *Aristote et les problèmes de Méthode* (Louvain), 83-103, rep. in Nussbaum (1986) .
- ・ Reeve, C.D.C. (1992) *Practices of Reason: Aristotle's Nicomachean Ethics* (Oxford) .
- ・ Smith, R. (1993) 'Aristotle on the Uses of Dialectic', *Synthese*, 96-3, Logic and Metaphysics in Aristotle and Early Modern Philosophy: 335-358.
- ・ ————— (1997) (tr. with a commentary) *Aristotle Topics, books I and VIII* (Oxford: Clarendon Aristotle series) .
- ・ 岩田靖夫 (1985) 『アリストテレスの倫理思想』岩波書店。
- ・ 神崎繁 (2011) 「哲学史」の作り方―生きられた「学説誌 (Doxographia)」のために」(神崎・熊野・鈴木編『西洋哲学史Ⅰ』講談社選書メチエ)。
- ・ ————— 訳 (2014) 『ニコマコス倫理学』(岩波書店、アリストテレス全集15)。
- ・ 篠澤和久 (2016) 「抑制のない人」とは誰のことか? —— アリストテレスの無抑制論の構図 —— (『理想』96号、pp. 26-37)。
- ・ 高橋久一郎訳 (2014) 『分析論後書』(岩波書店、アリストテレス全集2)。
- ・ 朴一功訳 (2002) 『ニコマコス倫理学』(京都大学学術出版会、西洋古典叢書)。
- ・ 山口義久訳 (2014) 『トポス論』(岩波書店、アリストテレス全集3)。

註

- 1 *enlaxa* の邦訳に関しては統一されておらず、訳者によってまちまちである。cf. 「定評ある意見」(神崎訳)、「通念」(渡辺・立花訳)、「多くの人々の是認する考え」・「一般的に受け容れられている信念」(岩田)。
- 2 cf. 岩田 (1985: 1) .
- 3 従来の訳語は「弁証法」・「弁証術」であったが、新版アリストテレス全集では概ね「問答法」という訳語に改められている。ギリシア語の原義に戻るという意味では至極真つのだが、*dialektikē* という単語は爾後の哲学史における *Dialektik* とのつながりが強く意識される語である(実際、フリーデは、本稿第二節で検討する論文の終わりのほうで、マルクスの弁証法について言及している)。このニュアンスを捨て去るには忍びなく、本稿では妥協案として「弁証問答法」というややぎこちない語でもって訳出する。
- 4 cf. 「さて、真なる第一の諸前提から推論がなされる場合、〔…〕その推論は論証である。他方、エンドクサからなされる推論は、弁証問答法の推論である」(Top. 100a27-30)。
- 5 cf. Natali (2007: 376) ; Burnet (1900: xxxix) 「私たちは、いかにして人間にとつての「善」の定義を見出すことができるのか。その答えは、私たちが弁証問答の手法 the method of Dialectic を採用しなければならぬこと(どう)である」。
- 6 cf. 神崎 (2014: 267) 「「そのまま意見の提示」〔…〕、「困難の明示」、「出発点の共有」の三段階が、初期の論考から一貫して採用されているアリストテレスのダイアレクティケーの方法である」・神崎 (2011: 402) 「この (1) 「現れ」の提示、(2) 「アポリアー」の別扱、(3) 論駁や意見の変更を通じた議論の確定」というのが「問答法」的議論の手続きである」。

- 7 Owen (1961) ; Nussbaum (1986) ; Irwin (1988) ; Cooper (1999) ; Kraut (2006) etc.
- 8 Smith (1993) ; Natali (2007)・(2011) ; Karbowski (2014) ; Devereux (2014) . このうちナタリとカボウスキーは、EN第一巻を『分析論後書』の方法論で読み解くことを試みている。
- 9 Barnes (1980) ; Frede (2012 : 185) .
- 10 cf. Barnes (1980 : 490) ; Cooper (2009 : 9) ; 神崎 (2011)・(2014) .
- 11 Owen (1961) .
- 12 本稿の内容に関係するのは、オーウェンの論文の前半部 (pp. 83-92) であるが、同論文の後半では、前半の解釈の補強として、『自然学』で展開される各議論にプラトン『パルメニデス』の影響を探っている。
- 13 Owen (1961 : 85-6) .
- 14 cf. Smith (1997) ; Frede (2012) .
- 15 クーパーにならうとしようと解する。cf. Cooper (2009) .
- 16 Owen (1961 : 89) .
- 17 Barnes (1980 : 498ff.) .
- 18 Smith (1993 : 346) .
- 19 cf. *Rhet.* 1356b28-35.
- 20 Smith (1993 : 345) . cf. *Top.* 104a8-11.
- 21 Smith (1993 : 347) 「アリストテレスのいうエンドクサとは、したがって、たんに様々な見解であるにすぎなく」。
- 22 Smith (1993 : 347) . cf. *Top.* 105a35-b5.

- 23 *endoxa* は、「思ひなし *doxa* のうちに *en* ある」というギリシア語の語形からもわかるように、或る人にとつて「*ἐνδοξία* あると」思われる *doklein* 「思ひなし *doxa*」の一種である。cf. Kraut (2006 : 95 n.2) .
- 24 Reeve (1992 : 37) .
- 25 Owen (1961 : 89) ; Barnes (1980 : 490) .
- 26 ただし、これは無抑制論以外の他の文脈においても同様に、「現われ」と「エンドクサ」を同一視しうるところを担保しない。フリーデは、「*endoxa*」・「*legomena*」・「*phainomena*」が同じものを指していると安易に解すべきでなく、アリストテレスの語法を保持する¹⁾ことを推奨する。cf. Frede (2012 : 214) .
- 27 Owen (1961:85-6, 90-2, n.18) . ただし、オーウェンの論文が『トピカ』の「弁証的問答法」に言及する際には、基本的に『自然学』の議論への適用を念頭に置いている。
- 28 Cooper (2009 : 20) .
- 29 *ibid.*
- 30 本稿では、無抑制論解釈の詳細な議論に立ち入らず、あくまで、そこで採られている方法に着目する。近年の研究として以下を参照。cf. Charles (2009) ; 篠澤 (2016) .
- 31 cf. 1147b14-17.
- 32 Barnes (1980 : 494) .
- 33 Frede (2012 : 204) .
- 34 Barnes (1980 : 495) .
- 35 cf. 1095a28-30.
- 36 Barnes (1980 : 510) .

- 37 Kraut (2006) .
- 38 Frede (2012 : 200ff.) ; Owen (1961) ; Barnes (1980) ; Irwin (1988) ; Nussbaum (1986) ; Cooper (1999) .
(2009) .
- 39 Frede (2012 : 196) . cf. *Top.* 104a10, 104b19, b34, 176b27-30.
- 40 Frede (2012 : 198) . cf. 1095a30-b13.
- 41 Frede (2012 : 185, 214) .
- 42 Frede (2012 : 214) .
- 43 Frede (2012 : 215) .
- 44 Frede (2012 : 214) .
- 45 アリストテレス自身は三つと言っているが、内容的には四つである。スミス・山口にならって、四つと解す⁸⁹。cf. Smith (1993) ; 山口 (2014) .
- 46 ハッピの「討論のために」ということを、『弁論術』における「公開討論」と結びつける解釈については、cf. Smith (1993 : 350-351) .
- 47 「弁証的問答法」におけるこの契機の重要性については、cf. Smith (1997) ; 神崎 (2011) ・ (2014) . 次節で見る *EE* の引用箇所においても、この表現は用いられている。
- 48 *pace* Cooper (2009 : 20) .
- 49 cf. Owen (1961 : 85-6, 90-2, n.18) .
- 50 Irwin (1988 : 28) .
- 51 Smith (1993 : 337) . cf. *APr.* 24b10-12; *SE1* 7a15-20; *APo.* 77a31-35; *Top.* 155b9-10.

- 52 Smith (1993 : 338) . cf. *Rhet.* 1354a1-3, 1355b8-9; *SE*172a13-15.
- 53 Smith (1993 : 352) .
- 54 Smith (1997) .
- 55 山口 (2014) の補注にならって、『ゴルギアス』第二部から構成した。
- 56 cf. 神崎 (2011) ・ (2014) .
- 57 cf. 高橋 (2014 : 347) .
- 58 この箇所の重要性については、バーンズ、スミス、フレーデ、岩田、神崎といった識者が揃って指摘している（ただし、惜しむらくは、岩田は「歩みを変える」という「弁証的問答法」との関連において肝心要の部分を省略して引用する）。